



Title	臨床倫理に携わる看護職に求められるコンピテンシーに関する研究
Author(s)	木村, 禎
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16965号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16965
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99809
Type	doctoral thesis
File Information	Tadashi_Kimura_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称:博士(文学)

氏名: 木村 禎

学位論文題名

臨床倫理に携わる看護職に求められるコンピテンシーに関する研究

・本論文の観点と方法

本論文は、臨床倫理に携わる看護職に求められるコンピテンシー、すなわち倫理的問題に直面した際に、状況を的確に把握し、関係者の価値や利害を考慮しつつ熟慮し、実践的判断へと結びつけるための個人の根源的資質・能力とは何であるかを明らかにすることを目的としている。とりわけ、看護職が実際の臨床現場において倫理的問題に関与する際に行っている思考や判断のあり方を、哲学的・倫理的観点から理論的に捉え直すことに、本論文の中心的な関心がある。

従来の看護倫理学や臨床倫理学においては、生命倫理の四原則やガイドラインを用いた規範的検討が中心となってきた。しかし、こうした枠組みは、看護職が日常的に直面する、関係性に深く根ざした倫理的葛藤や、明確な正解が存在しない状況における判断のあり方を十分に説明しきれない側面をもつ。本論文は、この点を問題として捉え、看護実践に内在する倫理的能力を、単なる規則遵守能力ではなく、状況に即した判断を可能にするコンピテンシーとして再定義しようとするものである。

方法論的には、本論文は質的調査研究と哲学的・倫理学的概念分析とを組み合わせた手法を採用している。第一に、臨床倫理に携わる看護職を対象とした質的調査を実施し、倫理症例の検討や対応に際して、看護職がどのような点に着目し、どのように思考を進めているのかを明らかにする。第二に、その調査結果を素材として、臨床倫理学、徳倫理学、ならびに現代哲学における感受性概念の議論を参照しつつ、看護職に求められる倫理的能力の内実を哲学的に分析する。

このように本論文は、臨床倫理に携わる看護職に求められるコンピテンシーとは何であるのかを明らかにすることを目的として、理論的考察と実証的調査とを往還させながら論究するものである。とりわけ、看護職に求められる倫理的能力を、単なる知識や手続き的技能としてではなく、個人の根源的資質・能力として捉え直す点に本論文の大きな特徴がある。

・本論文の内容

序章および第1章では、臨床倫理学の基本的枠組みが整理され、ジョンセンらによって提唱された臨床倫理の四分割法および四分割表が、日本の医療現場においても広く用いられている現状が確認される。同時に、臨床倫理学において重要な役割を果たしてきた「道理をわきまえた人」という人物像が、実践上しばしば参照されてきたにもかかわらず、その内実が十分に理論化されてこなかった点が問題として指摘される。本論文は、この「道理をわきまえた人」に求められる能力を、臨床倫理に携わる看護職のコンピテンシーという観点から再構成することを課題として設定する。

第2章では、日本における臨床倫理の四分割法・四分割表の使用実態を明らかにするため、倫理症例カンファレンスに携わる看護職を対象とした質的調査研究が行われる。調査の結果、四分割表は単なる意思決定のための手段としてではなく、倫理的問題を多角的に整理し、状況全体を網羅的に俯瞰するための思考の枠組みとして用いられていることが明らかにされる。一方で、その有効性は

使用者の理解度や、議論を導くファシリテーターの関与の仕方に大きく左右されることも示され、四分割表それ自体が倫理的判断を保証するものではないことが確認される。

続く第3章および第4章では、こうした調査結果を踏まえ、臨床倫理に携わる看護職に求められる能力の内実が、哲学倫理学の観点から理論的に分析される。本論文は、倫理的判断を単なる規則適用や計算的推論としてではなく、状況において何が道徳的に重要であるのかを捉える能力として理解する立場を採用し、その理論的基盤としてジョン・マクダウェルの感受性理論および徳倫理学の議論を援用する。

マクダウェルの感受性理論によれば、倫理的判断は、外在的な規範を機械的に適用することによってではなく、状況に内在する道徳的意味が主体に「見える」ことによって成立する。本論文は、この理解を臨床倫理の文脈に適用し、看護職が倫理症例に向き合う際に、患者の価値観や関係性、制度的制約といった複数の要素の中から、当該状況においてとくに重要な点を捉えようとしていることを明らかにする。ここで求められているのは、抽象的原理の知識ではなく、状況に応答する一種の認識的能力である。

しかし本論文は、マクダウェルや徳倫理学が想定するような高度に洗練された倫理的感受性を、臨床倫理に携わるすべての看護職にそのまま要求することは、現実的にも規範的にも妥当ではないと論じる。そこで本論文は、倫理的感受性を完成形として直接要請するのではなく、その基盤となる概念として integrity に着目する。integrity は、自己の実践に対して責任を引き受け、患者や関係者に誠実に向き合おうとする根源的態度であり、誰しもが一定程度は有していると考えられる資質である。

本論文では、この integrity を倫理的コンピテンシーの出発点として位置づけ、実践を通じてそれが拡張・陶冶・熟成されていく過程の先に、理想としての倫理的感受性が位置づけられると論じられる。このように、倫理的能力を段階的な形成過程として捉える点に、本論文の理論的独自性がある。ここで描かれる倫理的感受性は、理想化された徳の所有ではなく、現実の実践において漸進的に涵養される能力として理解される。

第5章では、こうした倫理的能力の構造が、看護界で用いられているコンピテンシー概念と結びつけて整理される。コンピテンシーとは、個人の行動を支える根源的特性であり、知識やスキルのみならず、動因や態度、自己イメージ、価値志向といった人格の中核に関わる要素を含む概念である。本論文は、臨床倫理に携わる看護職に求められるコンピテンシーを、integrity を基盤とし、その上に倫理的感受性が位置づけられる構造として理論化する。

さらに本論文は、integrity を陶冶・熟成させる具体的な実践の一つとして、四分割表を用いた倫理症例カンファレンスを位置づける。倫理症例カンファレンスは、単なる結論導出の場ではなく、看護職が自身の直観や違和感を言語化し、他者との対話を通じて情況理解を深めていく実践のプロセスである。四分割表は、その過程を支える認知的・対話的支点として機能し、倫理的感受性の形成を促す装置として位置づけられる。

以上のように本論文は、質的調査研究と哲学倫理学的概念分析とを組み合わせることによって、臨床倫理に携わる看護職に求められるコンピテンシーの内実を明らかにし、看護実践に即した倫理的能力の理論的基盤を提示するものである。